

Title	復旦大学図書館蔵宋元版解題
Sub Title	Bibliographical notes to the Song and Yuan editions in the Fu dan university library
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1999
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.34 (1999.) ,p.1- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000034-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

復旦大学図書館蔵宋元版解題

尾崎康

例言

経部

一 一九五九年刊の復旦大学図書館善本書目（油印本）に宋元版と著録する本をとりあげた。

一 中国古籍善本書目（上海古籍出版社 一九八五～九六年）に明版と著録されるものは、その旨指摘してある。

一 阿部隆一著 贈訂中国訪書志（汲古書院 一九八三年）に詳細な解題がある場合は、それを参照していただくこととして、その頁数を記入した。

晦庵先生校正伊川易伝残本（存卷一（首六葉欠）～四）

宋程頤撰（二元）刊

四冊

新補濃藍色表紙（二七・二×一六・五チセン）、金鑲玉装（料紙高二三・三チセン）。

首六葉欠。それで巻一首題はない。巻一の尾題が「晦庵先生校正伊川易伝上経巻終」。中国古籍善本書目がこれを標題とするのに便宜上したがう。巻二・三の首尾題は「周易上経巻第二（三）（隔七格）程頤伝（尾題にこの三字はない）」。第四冊の首題は「周易下経巻第四（隔七格）程頤伝」、尾題は「周易上経巻第四」。同

書目は八巻本とする。

左右双辺（一九・四×一二・三_チセ_ン）。一一行、二二字・注小字双行二六字。版心 小黒口、双黒魚尾、題「易幾」、字数と刻工名は刻されず、ごく一部に耳題。

「二作居」「一无者字」、音釈の母字などを墨囲陰刻。宋諱欠画が特に「貞」字に残るのは、南宋版の覆刻か。

蔵印は「曾蔵丁／福保家」（丁福保 一八七四～一九五二）、
「震旦大学／図書館／丁氏文庫」。

詩攷 宋王応麟撰 元後至元六年（一三四〇）慶元路儒

学刊（元明）至嘉靖二六年（一五四七）通修（玉

海附刻本） 一冊

香色覆表紙（二六・六×一六・五_チセ_ン）。やや濃いめの香色表紙の右半に清の高燮の「葩廬／劫余／長物」の朱印が捺され、その下に「家中玉海後所附各首具全其本無国朝補刊蓋猶明季／印行者然以此両種対之凡元刊之葉家獲本已万曆時／修補殆尽屯尚存十之七八補版止于嘉靖当邇時所／印可珍也」と墨書されている。

首に至元六年庚辰四月一日の孫厚孫の序。版心には「玉海叙

跋」とある。次に王応麟の序で、第一行の題は二字分が剝去されて空行であり、その銜名は第二行に低一格であり、版心に「攷序」とある。

本文首題は「詩攷／（低四格）韓詩（墨）」。

左右双辺（二一・六×一二・七_チセ_ン）。一〇行、二〇字・注文小字双行。版心 白口、双黒魚尾、題は「詩攷（卷一）」、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻す葉がある。「嘉靖丁巳年」の補刊年記の入った葉がある。

本文末に尾題がなく、空一行で王応麟の後序が低三格である。

蔵印は、ほぼ近代の詩経類の蒐集をもって知られる高燮（一八七八～一九六八または七八）のものである。「高氏吹万／楼所得／善本書」「格籥」「詩経／蔵」。吹万楼、格籥はその室名であるが、号に葩叟があり、「葩廬／劫余／長物」「葩廬／蔵本」（陰）も高氏の印か。明末清初の馮班（一六〇二～七一）または一六一四～八一）ではあるまい。他に「銅井／山廬／蔵書」。なお「復旦大学／図書館蔵」印が二種ある。

附釈音周礼註疏四二卷 漢鄭玄註 唐賈公彦疏 唐陸德

明釈文 元泰定四年（一三三七）刊（明前期）・正徳六・

一二年（一五一・一七）（明中後期）通修 二〇冊

元刊（明正徳修）十行本十三経註疏の一。

後補香色表紙（二四・七×一五・三_チ）^{（チ）}、襖装。

首に賈公彦の周礼正義序、一三葉。

本文巻首「附釈音周礼註疏巻第一」^{（低格）}朝散大夫行太学

博士弘文館学士臣賈公彦等奉／（同）勅選／（同）国子博士兼太子

中允贈齊州刺史吳興開国男陸徳明釈文」。

左右双辺（一四×一二・五_チ）。一〇行、一七字・注文小字

双行二三字。

版心 小黒口、双黒魚尾、題「礼疏（荒）幾」、下象鼻に刻
工名。これは修葉で、耳格もある。

卷三三四葉が原刻葉で、版心は白口、題の下方に「泰定
四年」とあり、刻工名が王英玉である。この本より早印の靜嘉

堂文庫蔵本などには致和元年（一三二八）と刻する葉であり、
刊年を泰定四年と限定するのは行過ぎかも知れない。

明修葉の多くの上象鼻に正徳六年（一五二一）、一二年（一

五一七）の補刊年記、また懷浙胡校、郷林重校、羅林騰の校抄
者名、下象鼻にそれぞれ刻工名を刻する。この十行本十三経註

疏の明修本は日本（靜嘉堂文庫等）と台湾（中央図書館等）に

少からず存在するが、そのほとんどすべてが原刻と補刻の双方
の年記を剝去している。その点、この本にはそれがなくて、原
刻は一葉ながら正徳の修工がかなり明らかになる。

補刻刻工はおおよそ明前期（補刊年記がないが正徳修かと思
われるものを含む）、正徳六年、同一二年、それ以後の明中後
期の四期に分けられる。年記は上象鼻にある。

明前期

王仲友 王良富 令甫 吳景春 施元昇 施肥 范朴

范元昇 陸榮 葉二 葉亦 葉安 葉再 葉再友

葉妥 葉起 葉馬 葉福 貴周令 楊四 楊旺

楊俊 楊会 熊一山 熊山 葵順 謝元林 謝元慶

正徳六年

周元進 吳盛 長方 黄世隆 陳元 葉士大（士大）

熊元貴（懷浙胡校 郷林重校）

正徳一二年

元善 文才 文旻 文昭 王才 田二 吳一

吳八 周二 周三 周士 周十名 周富 尚旦

細二 熊文 劉立 劉旦 劉京 劉昇（羅林騰）

明中後期

王元從 江元富 江元貴 江元寿 江毛 江長深 江盛
江貴 江達 余天札 余成広 余郎 余堅 余添進
陸四 陸記成 陸基 陸其郎 曾堅 曾椿 龔三
後修葉には墨釘の箇所が少くなく、かなりひどい葉がある。
卷一〇第二四葉、卷一四第二葉、卷一六第二三葉などが欠葉、
印刷野紙を挿入する場合がある。

蔵印は、「孫潜／之印」(陰)「潜／夫」(陰)(清孫潜 一六一八
?)、「嚴蔚／私印」(陰)「東門嚴／蔚收藏」(清嚴蔚)。

礼経会元四卷 宋葉時撰 [明]刊 四冊

後補薄茶色表紙(二五・七×一七_チセン)、包背装。題簽が第一
冊に残り、「礼経会元」と墨印を捺す。

至正乙巳(二五年)潘元明序、至正二六年陳基序、竹埜先生
序(至元二五年・六世孫葉広居撰 墨釘多)、礼経会元目錄。

本文卷首「礼教会元第一卷」(一格)宋竜図閣学士光祿大夫
贈開府儀同三司南陽郡開国公食邑二千一百戸食実封一百戸諡文
康葉時著。

左右双辺(二〇・七×一三・五_チセン)。一一行、二四字。版心
白口、魚尾がなく、横線をもって四格に分けて、第二格に

「礼経会元第一卷」のような題、三格に丁付。傍線、傍点を刻
する。

やや大型の「湛園／蔵書」印。清初の姜宸英(一六二八〜九
九)の印章か。

尾題「礼経会元第四卷終」。

元至正二六年江浙行中書右丞潘元明刊本の覆刻本とされる。

元刊本はお茶の水図書館(成實堂文庫)、台北の故宮博物院
(二部)、アメリカの国会図書館にあるが、中国古籍善本書目
は著録を見ない。同書目は復旦大蔵本を北京図書館、北京大
学図書館、上海図書館、杭州大学図書館、華南師範大学図書館の
各蔵本とともに嘉靖五年(一五二六)蕭梅林刻本とする。北京
図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊
記が存在するのであるが、その次に一一行二四字、白口、左
右双辺と復旦本と同じ行格の本が「明刻本」とあり、直接に比
較する機会を得られていないいま、嘉靖五年蕭梅林刊本と断定
はできない。

礼書一五〇卷 宋陳祥道撰 宋慶元五年(一一九九)跋

刊 元至正七年(一三四七)福州路儒学・[明]逯修

後補金切箔散薄青綠色表紙（二六・二×一七・六センチ）。

元の雍虞集の重刻礼楽書序、宋建中靖国元年正月二七日尚書礼部牒、元至正七年余載の序、その後「校勘督工／直学楊聰／直学張文俊／司書張伯通／葉鉞 黄誠 陳淦／六齋訓導／陳良琛 鄭拱辰 韋泰／福州路儒学正陳 彬／福州路儒学教授林光大」、慶元五年陳岐跋、林子冲書と続く。進礼書表、陳祥道の礼書序、そして礼書目録。

本文卷首「礼書卷第一／^{（低）}冕服^{（隔）} 十二章之服^{（隔）}」
大裘而冕[／]^{（低）}衰冕^{（隔）} 鷩冕^{（隔）}。

左右双辺（二一・八×一六センチ）。一三行、二二字・注文小字双行二七／三二字。版心 白口、双黒魚尾、題「礼書幾卷（フ）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に稀に刻工名。刻工名は鮮明でなく、元修の范順と単名の天文用伯厚 祐徳等。宋諱欠画は玄弦 敬 弘 殷 恒 貞 徴 匡 筐 敦 字に行われているが、いずれも元修葉、桓字を「^{（瀕）}聖」^{（御）}とし、觀字を「^{（嫌）}名」とする例が合せて一〇ほどもあるが、これも元修葉である。

元修にも漫漶のかなり甚しい葉があり、一方、印面の鮮かな明修葉がある。

尾題は「礼書卷第一百五十終」。その後に至正七年の礼楽書後序がある。

蔵印は「韓氏／蔵書」「玉雨／堂印」（清韓泰華）、「延古堂李氏珍藏」（文龍）、「国立暨／南大学／書珍藏」。

中国古籍善本書目（二二一四・五番）も、この本を含めて九部を元至正七年福州路儒学刻明修本とするが、中国訪書志（二〇三・三九七頁）は夙に陌宋楼蔵書志等に基き、序文によって、宋慶元刊本の版木が元至正七年に福州路儒学で大きく修補されたもの、すなわち本来は宋刊本であることを指摘している。現存本はほとんど明中期ごろまでの修本で原刻葉がないことにもよるが、一九九六年一〇月に東京都立中央図書館で展観された北京の中国書店蔵本は、原刻葉を多く含む元至正修までの早印本であった。

六書統二〇卷 元楊桓撰 元至大七年（一三〇八）序刊
（江浙行省） 後至元三年（一三三七）・〔明〕通修

後補香色表紙（二八・七×一九・七センチ）、襖装。

首に至大元年倪堅の六書統序、劉泰の六書統序、楊桓の六書

統序、そして六書統目録がある。

本文首題は「六書統卷第一」(低格) 奉直大夫国子司業楊桓
攷集」。左右双辺(二二・七×一五・九_チセ_ン)。八行、一四字・
篆文九ノ一字・注文小字双行二三ノ二四字。

版心 線黒口、双黒魚尾、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工
名、題は卷一は「統形」、卷二が「会」または「章」「統章」な
ど小題。刻工名は、三木 王寧 朱大存 徐愛山 許成 趙秀、
于子文中木丑予余立而仲余胡辛茅寿胡茂侃
森栄蔣章屠。

卷末「六書統卷第二十内」の後に一行を空けて「一三年八
月江浙等処儒学提举余謙補修」の一行がある。上が空格らしく、
次の「一」が至正の「正」の末画ではないかとも思われるが、
そうであれば西湖書院余謙の修がもう六年降ることになる。な
お中国訪書志四一九頁を参照。

欠葉が少からずあり、しばしば匡郭と版心を刻した紙が当て
られている。卷五第二二・二三葉、六一二八、七一二七・二八、
九一七・一八、一一一七・一〇、一三一・二、一四一二五・
二六、一七一一・三、一八一三一・三三、二〇一二三・二四。
他に下半が大きく欠損した葉がある。

明修葉は文字が細目で鮮明である。

蔵印「呉印ノ万春」、「涵ノ公氏」、「寄傲」、「影緑軒ノ圖書印」、
「弗山ノ樂者」、「黠樓ノ書堂」。復旦大学に收められた近人龐元
澄の百櫃樓蔵書の一。

又 二〇冊
後補金砂子散藍色表紙(三一×一九・九_チセ_ン)、襖装。
劉泰・倪堅・揚桓の順に六書統序、六書統目録があつて、本
文に入る。

前掲の一六冊本と同版・同修であるが、それより後印で、卷
七第一・二葉や卷一二第九・一〇葉が欠葉となり、卷四第六葉
の上半が欠損したりしている。卷末の余謙の修補記も同じ。
蔵印は「何焯ノ之印」、「鍊崖ノ一字ノ童白」、「汪錯之印」。

増修互註礼部韻略零本(存卷一後半第三三葉以下・卷二
前半至第二六葉) 宋毛晃増注 毛居正校勘増 元
至正一五年(一三五五)建安陳氏余慶書堂刊(元)修
二冊
後補金切箔散青色絹表紙(二四・六×一五・八_チセ_ン)、襖装。

卷二の首題が「増修互註礼部韻略卷第二 下平声（墨圍）／
（低格）衢州免解進士毛晃増註／（低格）男進士（空格）居正校勘重
増」。同版本（未修）が靜嘉堂文庫に存するが、その巻一卷頭
とほぼ変りがない。

左右双辺（二一・二×一三・八チン）。一一行、注小字双行二
八字。版心 小黒口、双黒魚尾、「毛勺一フ」のように題する。
耳格はない。また巻一の尾題の前に木記はない。

復旦大学善本書目も中国古籍善本書目（四九二七番）も元刻
本と著録する。元刊本には至正四年余氏勤徳堂刊、同一五年陳
氏余慶書堂刊、同年日新書堂刊、同二六年秀岸書堂刊の各本の
存在が知られていて、相互に覆刻の關係にあり、いずれも巻一
末の尾題があり、また刊記を剝去した痕跡を持つ本もある。復
旦本は、書影を比較すると、「至正乙未妃僊／余慶書堂新刊」
靜嘉堂文庫蔵本と同版に見えるが、この刊記がないわけである。
本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本
であろう。

蔵印は、「紅豆山莊」（陰）（錢謙益 一五八二―一六六四か）、
「朱十／彝尊／錫鬯」（朱彝尊 一六二九―一七〇九）、「翁」（陰）
「翁印／方綱」（陰）「方／綱」（翁方綱 一七三三―一八一八）、

「味経／書屋」（張燮 一七五三―一八〇八か）、「方氏若／衡會
觀」（方若衡 清道光ころ）、他に「承濂／私印」（陰）「曙／華」、
「奠／蔵」、「殿中／司馬」（陰）、「朱／游／僊」。

古今韻音拳要三〇卷（存七卷 一・二・五（第八―一八
葉）・一二（一七―二六葉）・二二―二三（二四葉以下）

元黄公紹原撰 熊忠拳要〔明前期〕刊（覆元刊本）
〔明〕修 二冊

後補紫色表紙（二七×一六・六チン）。

首に壬辰（至元二九年）劉辰翁、丁酉（大徳元年）熊忠の序
があり、後者の末の裏面に次の一〇行の木記が附刻されている。

「京昨承 先師架閣黄公在軒先生委／刊古今韻會拳要凡三十卷
古今字画／音義瞭然在目誠千百年間未睹之秘／也今繡諸梓三復
讎校並無譌誤忽与／天下士大夫共之但是編係私著之文／与諸肆
所刊見成文籍不同竊恐嗜利／之徒改換名目節略翻刊纖毫爭差致
／誤学者已經 所屬陳告乞行禁約外／收書君子伏幸／藻鑑

後 学 陳 棗 謹白」。続いて元統三年李木魯珣の序韻會
拳要書考と至順二年余謙の序。そして二行に跨って古今韻會拳
要凡例と題した次行と次々行に、昭武公紹直翁編輯、昭武熊忠

子中挙要とあり、礼部韻略七音三十六母通攷が二三葉も続く。

本文巻首「古今韻会挙要卷之一 甲」一、甲は円で囲まれ

る。左右双辺（一九・三×二二・三チ）。八行、注小字双行

二二字。版心 小黒口、双黒魚尾、題「韻（勻） 幾卷（フ）

（丁付）」。

元版の覆刻本で、陳寔の木記も原刊本のままである。

史 部

晋書一三〇卷（存六五卷 卷四〇六・二五〇四三・四九

〇五七・六二〇八〇・一〇六一・一一三〇一

五・一一七〇一二二）唐房玄齡等奉勅撰 何超音義

〔元 浙〕刊 明天順公牘紙印本 一四冊

後補香色表紙（二八×一九・一チ）。

巻首「帝紀第六（隔六格）晋書六」。

左右双辺（二二・二×一六・七チ）。一〇行、二〇字。版心

線黒口、双黒魚尾、ときに上象鼻に字数、下象鼻に刻工名、

題は「晋帝紀四（丁付）」のように刻する。刻工名は、一秀

士中 四郎 江原 李友文 林茂実 孟亨 施亨輔 毗陵彭

仁山 楊景 劉子承、他は単字。

巻四九第一六葉が補写。

紙背が明天順二・三年（一四五八・九）、応天府江浦県・直

隸常州府宜興県などの年代や地名を記し、大型の公印を捺した

糧米送納関係の公牘紙の葉が七、八ある。他の料紙がほとんど

白色であるのに、公牘紙は黄味がかったもの、やや厚手のもの、

逆に白く薄いものと、いずれも紙質が異なる。

版面は全体にさほど磨滅しておらず、むしろ補刻葉はないが、

上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の

保管の方法に欠陥があったものか。天順の公牘紙の廃棄の時期

からみて、成化後半（一四七六〇八七）以降の印本と思われる

が、南監二十一史本にみられる正徳一〇年の修、さらには嘉靖

の大量の補刻が、この後これらに対して行われたのであろう。

梁書五六卷 唐姚思廉撰 〔南宋前期 浙〕刊 〔南宋中

期・元・明〕至嘉靖一〇年通修〔嘉靖〕印 二〇冊

後補薄藍色表紙（三三×二二・四チ）、金鑲玉装（料紙高さ

二七・九チ）。

梁書目録、そして本文。巻首「紀第一（隔八格）梁書一（低七格）

散騎常侍姚^(二隔格)思廉撰。この葉は元修で、左右双辺(二

二×一七・六^チセ^ン)。九行、一八字。版心 白口、魚尾がなく、

題は「梁書紀一」。原刻葉はなく、すべて南宋中期以後の修葉であるが、それぞれに単・双魚尾、原刻に似せて横線で五格に仕切るもの、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻する葉など変化に富む。刻工名は南宋中期修に、王元 王元亨 余敏 徐瑛

張成 高文 陳寿 楊榮 陳寿 徳裕 趙良、元修に大用

太亨 王明 王高 王徳明 朱玉文 任昌 茂山 茂実 何建

彦明 許成 范雙評 高顯 雇茂 蔡彦 繆謙 芦開三、明

嘉靖修に中后 易堂 胡章 張昆 黄雲 黄琯 黄球 黄珣

黄珪 黄琇 黄琢 黄碧 黄瑜 黄璣 劉元 龐知実。

嘉靖修葉が鮮明であるから、同二〇年ごろの印であろうかと思われる。

蔵印は「焮防ノ之印」、「錦ノ泉印」、「半ノ宰」、「一字半王」、

「国立同済ノ大学図書ノ館蔵」。

陳書三六卷 唐姚思廉等奉勅撰 〔南宋前期 浙〕刊

〔南宋中期・元〕通修

八冊

近補濃紺色表紙(三二・九×二二・三^チセ^ン)。

首に陳書目録と叙録。本文首題は「紀第一(隔八格)陳書一

(低七格)散騎常侍姚 思廉 撰」。左右双辺(二二・二×一七・

七^チセ^ン)。九行、一八字。この首葉は南宋中期の修で、版心 白

口、単黒魚尾、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名があり、題は「陳書紀一(丁付)」。

原刻葉はごく僅かに残るが、伝八(卷一四)第一一葉のように、版心が横単線で五格に区画されてはいるが、それも薄れて太く加筆されており、刻工名は消えてしまっている。南宋中期

修葉も、刻工の残るものは各巻ともほんの数葉ずつにすぎない。

元修刻工には、王全 王百九 任阿伴 李崑 徐愛山 孫開一

陳友一 桵慶一 葉禾 熊道瓊 蔣蚕、そして王桂 任亮

胡慶十四 翁子和 单侶 茅文竜 徐文 揚十三 騰慶の名が

みえるが、この前半の者は元の第一次修、後半は第二次修であ

る。これは台北の中央図書館蔵の三本には前者の名しかないの

に、靜嘉堂文庫蔵本に後者の名が現れることで明らかになった。

すなわちこの本は元代に両度の補修を経、明に入って前期から

中期ごろにかけての、あるいは嘉靖の二十一史成立のための補

修の少し前の印本であろう。

そのためか補写葉も少なくない。目録第六葉、卷七第五・七・

九葉、九一五、一一一〇・一一、一七一三、一九一七、二
一四・五・一五、二二一三・六、二八一四・五、三〇一六、
三二一三、三四一四・一五・二五、三五一一三・一四。これ
らは靜嘉堂本では南宋前期の原刻葉と南宋中期修葉であつたも
のが、ほぼ半々である。

眉上に墨筆で校語が書入れられている。補写と同じ明代のも
のか。

藏印は判読不明の一印と、「国立同済／大学図書／館藏書」
印。ただし目錄首に五・七×一・六チの印記を切取した跡が
ある。

なお巻三第一〇葉は、百衲本とその底本の靜嘉堂本は刻工が
南宋中期修の王玩で欠面をしていないのに、この本は刻工名が
消えて「瑱」字を四回、「敦」字を二回、末面を欠いている。

周書五〇卷 唐令孤德棻等奉勅撰〔南宋前期 浙〕刊
〔南宋中期・元〕至明嘉靖一〇年通修 一二三冊
後補藍色表紙（三三三・九×二二・四チ）、金鑲玉装（料紙高
さ二九・四チ）。

後周書目錄、叙録があつて本文。巻首は「紀第一（七格）周

書一／（低九格）令孤德棻 等撰」と題。左右双辺（二二・二×
一七・七チ）。九行、一八字。原刻葉は全く残つておらず、こ
の首葉は元修、刻工雇恭であるが、版心 線黒口、双黒魚尾、
題は「周書紀一（丁付）」、上下象尾に字数と刻工名が入れら
れてある。

上象鼻に嘉靖八、九、一〇年の補刊記のある葉があり、嘉靖
二十一史本である。前掲の梁書よりやや漫漶が進んでいるから、
嘉靖後半から万曆初ごろの印本であろう。

隋書八五卷 唐魏徵等奉勅撰 元大德間饒州路儒学刊本・

〔元後期〕覆元大德饒州路刊本の混配 明正徳一〇・

嘉靖八一〇年修〔万曆〕印 一二三冊

香色表紙（三〇・三×二〇・×一チ）。

隋書目錄。本文首題は「帝紀第一（隔七格）隋書一／（低三格）高
祖上（隔三格）特進臣魏 徵 上」。左右双辺（二一・五×一五・
二チ）。一〇行、二二字。版心 線黒口、第一葉は単魚尾であ
るが、双・三とあり、「隋帝紀一（丁付）」のように題する。
稀に上象鼻に刊刻を担当した饒州路学などの名、下象鼻に刻工
名がある。路・県・州学名が原刻本にはかなり大量に雕られて

いたが、原刻葉は磨滅し、補刻葉にはないから減つて、饒学（饒州路儒学）、番泮（鄱陽郡学）などいくつかが残る程度である。刻工名も少くなり、饒州路本の原刻の付一 貴邦 貴和、同補刻の趙伯、覆刻本の士中 方亨 王德明 徐艾山などがみえるにすぎない。

いわゆる元大徳九路儒学刊十史の隋書は、元の後期ごろに覆刻本が作られたが、明のごく早い時期には両者の版木が南京の国子監に收められていたらしく、両者から良版を選んで一本として印行されるようになった。明代では正徳一〇年、嘉靖八・九・一〇年に補修が行われ、同一二年修の葉がただ一葉ある。漫漶が進み、その正徳嘉靖の補刊年記もかなり消えている。眉上に朱筆の注記があり、挿紙に「当是明人所書」と書かれている。

五代史記七四卷（欠卷四二・五八） 宋歐陽脩撰 宋徐無党注 〔元〕覆宋慶元五年刊本 至〔明正徳〕通修

後補薄暗綠色表紙（二六×一五・二センチ）、襖装。

副紙に無名氏の識語二則（省略）。

五代史記序、五代史記目錄。

本文卷首「五代史記第一／梁本紀第一（隔格）歐陽脩撰 徐無党注」。

左右双辺（一九・七×一二・三センチ）。一〇行、一八字・注文小字双行二一字内外。版心 白口、双黒魚尾、題「五代幾」等、上象鼻に大小字数、下象鼻に丁付と刻工名を、また耳格を刻する。この首葉は明修であるが、明修葉には粗黒口が多い。刻工名は原刻では単字の天、智など、輝は正徳の修か。卷一八末の尾題の前に「慶元五年魯郡曾 三異 校定」の一行があるが、これも明修葉である。版心に「丁亥」の二字が刻された葉は、比較的早い時期の修とみられ、成化三年（一四六七）第一次修であろうか。

百衲本二十四史は、当時傅氏雙鑑樓蔵のこれと同版の無修本を用いているが、卷十八に右の宋慶元五年の校記、卷二三・二四・三四・五七・五八末に同じ魯郡曾三異の校記があり、宋慶元五年刊本と称しているが、刻工名を検すれば元の覆刻本であり、天曆二年（一三二九）の新唐書とほぼ同じころの刊と考えるべきである。

蔵書印は「宋本」(円槽)「生／延州」、「宗建／私印」(陰)「常熟

趙氏／旧山楼／経籍記」「旧山／楼」(趙宗建 一八二八～一九〇〇)、「李莊仲／図書記」「海虞呉朝李／莊仲宝蔵」「雲山一葉／閣李氏／蔵書」(李莊仲)、「南陵徐乃昌／校勘経籍記」「徐乃昌読」「積学齋徐乃昌蔵書」「積餘秘笈／識者宝之」(徐乃昌 一八六二～一九三六)。

資治通鑑二九四卷(欠通鑑釈文弁誤) 宋歐陽脩撰

元胡三省音註 (元)刊 二〇〇冊

後補暗藍色表紙(二八・五×一七・三_チセ_ン)、金鑲玉装(料紙 高さ二五・二_チセ_ン)。

副紙に清の錢塘の呉城の題識。

王磐の興文署新刊資治通鑑序。全三葉のうち首半葉を欠く。この序を具備する元版は多くないが、この三葉の刻工は王昱であって、本文の多数の刻工に共通する名がなく、字様はやや遅れるかにみえる。すなわち元末明初ごろから附刻されたかとも思われ、胡三省の題跋を削除しないごく初印の上海図書館蔵の一五〇冊本には附いていないが、この本も明修のない早印本であるから、この本にこの序があることには興味がある。

一方、司馬光の資治通鑑序、胡三省の新註資治通鑑序はない。

続いて資治通鑑の総目一葉、司馬光の上進表と列銜、詔諭詔書、元豊・元祐の列銜七葉がある。これらは巻末にも重複してあり、本末は巻末に綴じられるはずのもので、その方が本文と同印であり、前のものの方が後印であるから、王磐序ともに後補されたとも考えられる。

本文巻首「資治通鑑第一／(低_一格)朝散大夫右諫議大夫權御史中丞充理檢使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉／勅編集／(低_六格)後学天台胡三省音註」。

双辺(二一・五×一四_チセ_ン)。一〇行、二〇字・注文小字双行。版心 小黑口、双黒魚尾、題「通鑑幾」、上象鼻に大小字数、下象鼻に丁付と刻工名を刻する。刻工名は三字の者が一八〇余にもなり、上海図書館蔵宋元版解題 史部(二)(斯道文庫論集 第三二輯 一九九八年 七～八頁)等に列挙したばかりであるから、それを参照されたくここには省く。そのごく一部が元至治二年(一一三二)福州三山郡学学刊の通志をはじめ、その前後の元刊本の刻工名と一致する。

卷二七二の巻末に「八月壬午起写甲申徹卷」と刻されているのは、胡三省が至元二四年八月二四日から二七日にこの巻に注したことである。上海図書館蔵本の一には、三七巻の巻尾にこ

のような字句がある。

通鑑積文弁誤一二巻を欠く。

前述のように「資治通鑑卷第二百九十四」の後に、総目、司馬光の上表、元豊七年十一月の進呈の列銜、奨諭詔書、校定・鏤板の列銜、さらに紹興二年両浙東路茶塩司公使庫の刊印の列銜が附刻されている。

蔵印は「虞山錢會／遵王蔵書」(錢會 一六二九―一七〇二)、「吳／城」(敦／復) (吳城)、「関中／于氏」、「何印／元錫」(陰)「何氏／敬祉」(陰)「錢唐何氏／夢華館／嘉慶甲子／後所得所」(何元錫 一七六六―一八二九)、「宝田／堂書／画記」(又任／之友)「□／記孫」。

又 (欠通鑑積文弁誤) 明弘治二・三・正徳九・嘉

靖一・二〇・二一年通修 二八〇冊

後補藍色表紙(二一・五×一六・五センチ)。

胡三省の新註資治通鑑序、首半葉補写。司馬光と王磐の序はない。

版心 上象鼻に弘治二年、弘治三年、正徳九年、嘉靖元年、嘉靖二十年、嘉靖二十一年等の補刊年記があり、国子監刊、監

生某などの文字を添える。

巻末に総目、司馬光の上進表、検閲文字・編集の五名の列銜、奨諭詔書、元豊八年の重行校定と元祐元年の杭州鏤板の一三名の列銜、そして紹興二・三年の両浙東路茶塩司の印造の列銜が附刻されている。

蔵印は「芳輯／読」(楯) (馮芳輯)、「夢云齋／書画蔵」(陰)「康／侯」、「葉／徳輝」(郎／園)「観古／堂」(葉徳輝 一八六四―一九二七)「定侯／所蔵」(拾経楼) (葉啓勲)「葉啓／潘蔵」(葉啓潘)等。

宋史全文統資治通鑑三六巻 増入名儒講義統資治通鑑宋

季朝事實二巻 元欠名者撰 (元 建安) 刊 三三冊

前者は目録では両宋全代の編年史であるが、実は南宋の理宗に終り、後者がその後の度宗・少帝の代を扱う。本によっては首に統資治通鑑または宋史全文資治通鑑の李燾の序文が附綴されたものが附刻されて、李燾の撰と仮託されているが、おそらくは建安の書肆がそれを抄録したものであろう。

後補暗藍色表紙(二七・二×一六・九センチ)、金鏤玉装(紙高二三・七センチ)。

首に二葉、墨野九行の白紙が綴じられているが、ここに李燾の序を宛うつもりであったのか。次の一葉の表裏の宋朝玉裔と宋朝伝授は、宋朝の諸王を含めた系図と皇位継承図である。続いて統資治通鑑長編目録。その首題の次に、左の四行の木記がある。「宋史通鑑一書見刊行者節略太甚諸者不無遺／恨焉本堂今得善本乃公所編者前宋已盛行／於世今再綉諸梓与天下士大夫共之誠爲有用／之書回視它本大有逕庭具眼者必蒙賞音幸鑑」。

本文首題は「宋史全文統資治通鑑卷之一」で、撰者名を記さない。首尾題は特に後半において一致せず、「宋史全文」を省いて「増入名儒」を冠するもの、尾に「長編」を附するものなど、実体にそぐわない。

双辺（一九・八×一三・一センチ）。一六行、二五〜二六字・注文小字双行。注文が長く続くときは半葉に二〇行を収める。版心 小黒口、双黒魚尾、題「宋監幾（フ）」、下象鼻の右側にときに刻工名。刻工名は、文希 林九 呉友 呉鳥 鄭賜 景祥 順意 范成等。「太祖建隆元年」のように耳題を、また眉上に見出語を行二字で刻する。

本文は年代（千支）を墨囲陰刻して始り、注文は低一格で呂中曰、朱文公、曾鞏政要、富弼講義などと墨囲陰刻してこれら

宋儒の評語を載せる。目録には度宗、少帝と南宋末代をも含むようにいうが、卷三六は理宗で終っている。

卷三〇末に木記の匡郭（左右双辺一四・八×三・七センチ）が刻されるが、文字は削除されている。

尾題「名儒講義宋資治通鑑卷之三十六」。

続いて「増入名儒講義統資治通鑑宋季朝事実」二巻がある。

巻次は記さないが度宗と少帝の二巻に別れる。少帝記の尾題を欠く。度宗紀の尾題は「増入名儒講義統資治通鑑宋度宗事実」。

版式等は宋史全文統資治通鑑にはほ同じ。

両者を通じて各冊の首尾が破損し、次のように欠葉がある。

卷三首半葉、卷五第二四葉以下、卷六第一・二葉、卷八第一葉、卷一〇第二〇葉裏以下、卷一二第四二葉以下、卷一三第一葉、卷一四第一葉表、卷一五第一七葉裏以下、卷一六第二葉表、卷一八第五五葉、卷一九第一葉、卷二二第六〇葉裏以下、卷二四第一〜一三葉、卷一六第五一葉以下、卷二七第一葉、卷三〇第一葉、卷三三第二四葉以下、卷三四第一〜四葉裏、宋季朝事実少帝第一九葉裏以下。

蔵書印「季印／振宜」「滄／葦」「御史／之章」（陰）「季振宜／蔵書」（季振宜 一六三〇〜？）、「鄆氏／士徵」、「宋印／育

「德」(陰)「公/威」「宋/公威」(陰)、「莒敬齋」「金門/口客」(陰)。

通鑑紀事本末四二卷 宋袁樞撰 宋宝祐五年(一二五七)

湖州趙与籙刊(元 嘉興府学)・明正徳二二年(嘉靖

初)通修 八四冊

後補銀砂子散薄朱色表紙(三一・一×二三・四_チセ_ン)、襖装。

元延祐六年陳良弼の補刊序、宋宝祐五年趙与籙の刊序、宋淳熙元年揚万里の通鑑紀事本末叙。通鑑紀事本末総目。

本文巻首「通鑑紀事本末巻第一(二_低格)三家分晋」。撰者の名は記さない。

左右双辺(二五・五×一九・一_チセ_ン)。一〇行、一九字、注小字双行。版心 白口、単黒魚尾、題「通鑑紀事本末巻幾」、葉によって上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻す。刊者の趙氏が宋室の一員のためであろう、避諱欠筆が相当に厳格である。玄弦眩縣朗 敬警驚 弘泓股匡胤 昃頰 恒恒暉 禎貞偵徵懲 署樹豎 頊勗 桓桓瑗完 構構毅 奮慎 惇敦勝 廓の各字。郭廓はほとんど欠かないが、卷二十七第五一葉裏第二行に例がある。また小字双行で桓を「欽宗_{御諱}」と、構を「太上_{御名}」または「高宗_{御名}」と、奮

を「今上_{御名}」「御名」とする場合があり、「太上_{御名}」はかなり多い。これらはほぼ淳熙二年(一一七五)嚴州郡学刊本にもあるから、この宝祐刊本は淳熙刊本を底本として刊刻され、基本的にはこれらの避諱を踏襲したものと考えられる。

尾題「通鑑紀事本末第四十二」。明嘉靖の比較的早い時期の修業である。

刻工は左表のように原刻と二期の補刻に分けられよう。

2 卜仲	4 方得時	王介	王亨	王亨祖	王春	王興
王興宗	王燁	5 史祖	7 何文	何文成	何祖	何豫
余和	余甫	吳炎	沈杞	沈祖	8 周松	周崇
林茂	10 徐侁	徐侃	徐松	徐拱	徐珙	翁期
茹鎮	馬良	11 張榮	陳必達	12 黄佑	13 虞桐	虞源
賈端	15 劉共	劉孚	劉隱	蔡成	16 錢玕	17 濮冲
鐘季升	21 顧祺	(以上原刻)				
2 丁璧	3 中明	4 仁端	王桂	王燁	5 史京	6 伍琇
8 林嘉	林嘉茂	金永	9 范刁	范仲	范仲夷	10 徐元
徐洪	徐嵩	徐楠	11 張成	得春	梁仁甫	12 彭崇得
曹戩	蔡徐	13 董繼思	蔡文	蔡虎	蔡茂	

(以上元末明初補刻)

6 朱銘 7 何愷 均佐 汪鏗 8 周春富 11 陳添孫 陸位
13 楊東浙 15 劉潤 19 羅嗣秀 (以上明補刻)

藏印は少くないが、その所有者があまりよくわからない。

「張井ノ之印」(陰)「畏堂ノ張氏ノ收藏」(陰)(張井)、「張印ノ口
煥」(陰)「鼎ノ文」、「杭州王氏九峰ノ旧廬藏ノ書之章」
「綬珊六十ノ以後所ノ得書画」(王体仁)、「能尋ノ孔顔ノ樂処」
「九華ノ之印」
「九ノ華」(陰)、「二□中」
「西ノ涯」
「賓ノ之」(陰)「賓ノ之」
「賜札堂」
「雲ノ林子」
「恃徳ノ者昌」
「烟ノ客」
「□□ノ居」(陰)。

通鑑統編二四卷 元陳樞撰 元至正二五年(一三六五)

松江顧遜刊〔明〕修 一二冊

後補黄土色表紙(三〇・八×一七・五_チセ_ン)。双郭の明印題簽
「通鑑統編」(外郭一六・七×四_チセ_ン)。

至正二二年周伯琦序、至正一八年陳基序、至正二二年張紳の
通鑑統編叙、至正一〇年陳樞の序、姜漸の通鑑統編序。通鑑統
編目錄。

本文卷首「通鑑統編卷第一(隔四格)陳樞」。

左右双辺(二一・三×一四・一_チセ_ン)。九行、二二字、注文小字
双行。版心 線黒口、明修葉はときに粗黒口、単黒魚尾、稀に
双魚尾、題「通鑑統編卷幾」、上象鼻に_ニく稀に大小字数、下
象鼻にときに刻工名、補刻葉には「訓導錢紳ノ李順刊」のよう
に刻される葉もある。眉上に干支の紀年を横書きする。

上海図書館蔵の無修本もかなり漫滅していたが、この本は原
刻葉の漫漶はかなり進んでおり、墨釘の箇所も少くなく、九割
は補刻葉である。補刻葉にも破損の進んだ葉があり、明も中期
以降の印であろう。

刻工は原刻の王叔敬の名がわずかに見られるが、他はほとん
ど明修である。毛達 王盛 呂臻 何漢 吳海 李順 有誠 徐進 徐
孟得 徐海 張思温 陳海 章敬 蘇良 馮敬等の名がみえ、校者と
しては、教諭、訓導の陳道曾、錢如埴がいる。

尾題は卷二四になく「通鑑統編卷第二十三」。

聖朝混一方輿勝覽三卷(欠尾) 元劉応挙編 〔明〕刊

後補銀砂子散黄土色表紙(二四・八×一五_チセ_ン)、襖装。外題
「混一方ノ輿勝覽」と篆書。右方に「元槧本」と墨書する。

副紙に清の陳鱣（一七五三―一八一七）の次の一文がある。

「元混一方輿勝覽三卷無纂人姓名蓋建安葉本其文簡核今皆滾伝甚尠／元史地理志大都路領州十此云州九者龍慶州本縉山県属上都路之奉／聖州延祐三年始升爲州故地成宗紀至元三十一年復立平陽之芮城／陵川等県蓋元初二県曾廢此書澤州無陵川県解州無芮城県可証／其刊於世祖朝而書中又書中又有冀寧晋寧之名係大憲中所改則刊／成之浚別有改易要皆隨時增損爲之以致体例不合也大寧路又有霍州／景州文志無之此書亦未詳其沿革姑記之以俟攷／右録嘉定錢辛楣少詹事元混一方輿勝覽跋「簡莊／執文」
「仲／魚／凶／像（肖像）」（印）（陳鱣）。

新編聖朝混一方輿勝覽目錄。題は跨行大字。「新編」の二字は入木されたもののようにみえ、「覽」と「目」の並びかたも整っていないのは「目錄」も入木なのか。この尾題も大字で、やはり「新編」「目錄」が入木か。正統元年（一四三六）刊本は新編事文類聚翰墨全書の後乙集であったから、この題が「新編事文類聚」であったものの「事文類聚」を剝去し、ここに「方輿勝覽」の文字を補っているといわれるが、ここではそのような操作の必要性は考えられない。

本文巻首「聖朝混一方輿勝覽卷上」、同じく跨行大字。次行

から楷書で、正統刊本と同文の次の五行木記がある。「唐虞三代以来之州域北不踰幽並南不越嶺徼東至于海西／被子流沙其間蛮夷戎狄之地亦有未尽啓闢者方今六合混／一文軌会同有前古所未有之天下皇乎盛哉是編凡山川人／物沿革本末靡不具載學士大夫端坐牕几而欲周知天下摻／弄翰墨而欲得助江山不勞余力尽在目中信乎其爲勝覽矣」。

双辺（二〇×一二・五_チ）。一二行、二六字・注文小字双行。正統刊本より匡郭が一廻り大きく、字数も六字増えている。版心 粗黒口、双黒魚尾、題は事文類聚の名残りで「上（中・下）方后乙集」。上象鼻の上半がほとんど墨で塗りつぶされ、下に文字があるようにみえるが、あるいは刊年か。

各巻末とも尾題はないが、巻下の本文は甘肅等処行中書省の後半の瓜州までを収録し、嶺北等処行中書省の記事を欠いているようである。

蔵印は「毛」「晋」「子／晋」（毛晋 一五九九―一六五九）、「毛辰／之印」（毛辰 一六四〇―？）、「季滄葦／蔵書印」（季振宜 一六三〇―？）、「歙西長／塘鮑氏／知不足齋／蔵書印」（鮑廷博 一七二八―一八一四）、「得此書費／辛苦後之／人其鑿我」（陰）（陳鱣 一七五三―一八一七）、「錢江河／氏夢華／

館藏」(何元錫 一七六六―一八二九)、「庚申以/後冶侯/所得」(趙宗建 一八二八―一九〇〇)、「霞秀/景飛/之室」、「□力」。

この本は明らかに明刊であるが、中国訪書志著録(二四九頁)の台北の国立中央図書館北平藏等の明正統元年刊本とは別版で、他に著録されるところがないから、それを明らかにするため採りあげた。

東萊校正晋書詳節三〇卷 題宋呂祖謙編 (元 建) 刊

一〇冊

後補銀砂子散紺色表紙(二一・八×一三・九_チセ_ン)、金鑲玉装(紙高一八・八_チセ_ン)。

東萊先生晋書詳節目録。世系図および地図を欠く。

本文首題「東萊校正晋書詳節卷之一」。

左右双辺(一五・八×一〇・五_チセ_ン)、一四行、二四字。版心

線黒口、双黒魚尾、題「晋節幾」。眉上に標題を行二字で、

また耳題を刻する。玄匡 恒 貞 楨 微 昴 桓 慎 敦 等の文字に欠画がある。南宋末刊本の覆刻であろう。

台北の国立故宫博物院蔵の十史叢刻本(中国訪書志二四六頁)

の晋書の書影と対比すると、まったく同版である。巻頭を除き、刷りは比較的鮮明。

卷一四第五・七・九・一〇葉、卷二二第一一葉、卷二三第一葉は補写。

尾題「東萊校正晋書詳節卷之二十」。

蔵印は「亭林/之印」(顧炎武 一六二三―一八二二)、「商邱宋氏/收藏善本」(臣/擘)(陽)(宋 擘 一六三四―一七一三)、「

知不足/齋鮑以/文蔵書」(鮑廷博 一七二八―一八一四)、「

劉氏喜/海字燕/庭蔵書」(劉喜海 一七九三―一八五二)、「

周氏/圖書」、「延古堂李氏現蔵」(文)(竜)、「国立同済/大学蔵書」。

顧炎武のものは偽印であるという。

東萊先生校正隋書詳節二〇卷 題宋呂祖謙編 (元 建) 刊

五冊

後補香色表紙(二三・七×一五・一_チセ_ン)、襖装。

東萊先生校正隋書詳節目録。隋世系図と隋地理之図が各半葉。

「東萊先生校正隋書卷之一」(低一格) 帝紀(隔八格) 唐特進魏微 撰」。

左右双辺(一六×一〇・五_チセ_ン)。一四行、二四字。版心 線

黒口、双黒魚尾、題「隋幾」、眉上に標注を行二字で、また耳題を刻する。貞徵恒勗慎敦等の字に欠画が残っている。

晋書詳節と同じく台北の故宮博物院本と同版。

「東萊先生校正隋書詳節卷之二十」の尾題。

蔵印「拝経／樓呉氏／蔵書」(呉齋 一七八三―一八一三)、

「漱六執／之芳潤」(陰)(袁芳瑛 道光二五年進士)、「独山莫／

氏蔵書」(莫棠)、「劉印／承幹」(翰／怡)(劉承幹 一八八一

―一九六三)、「紫芝／閣」、「茹経／居士」。

又(存首七卷)

一冊

後補香色覆表紙(二一・四×一三・九_チセ_ン)。後補薄焦茶色元

表紙、「宋刻隋書詳節残存一之七卷 共分二冊」と外題を墨書、かなり古く清

初ごろのものか。

隋世系之図、隋地理之図。東萊先生校正隋書詳節目録、「卷

之十／経籍志」のところで切断して以下を削除し、「東萊先生

校正隋書詳節目録」の尾題だけを切ってきて繋げてある。七卷

で首尾完好のようにみせかけたものである。

蔵印「甲子丙寅韓徳均錢潤文／夫婦兩度携書避難記」「松江

読有用書齋金山守閣／両後人韓徳均錢潤之夫婦之印」(韓徳均・

錢潤之)、甲子は同治三年(一八六四)か。

文献通考三四八卷 元馬端臨撰 元泰定元年(一三三四)

西湖書院刊 後至元五年(一三三九) 余謙・明成化一

〇・一一(一四七四・五)・弘治一・二・一二・一八

(二四八八・八九・九九・一五〇五) 通修 八〇冊

香色表紙(三一×二〇・三_チセ_ン)、一部襖装。

馬端臨の自序は補写。文献通考目録、その末葉の尾題の次に

空一行で、至元五年江浙等処儒学提举余謙叙があつて、西湖書

院での補修のことを記す。次に泰定元年江浙省彫口于西湖書院

という。

本文巻首「文献通考卷之一／(低二格)鄱陽馬端臨 貴与

著」。

左右双辺(二五・八×一八・三_チセ_ン)。一三行、二六字・注文

小字双行。この首葉は明修で、版心 粗黒口、双黒魚尾、題

「文献通考卷一」。原刻葉は線黒口である。成化、弘治の補刻葉

は、この上象鼻に「成化十年／国子監重刊」のように補刊年記

がある。さらに標記のように、成化一一、弘治元・二・一二・

一八年のものがある。

補写葉が卷三五第一三葉、卷六三第六葉。欠葉が卷七四第一葉、卷七九第一〜四葉。

刻工名を三期に分けて表示する。

2 父本	3 大用	子仁	子明	子堅	小唐三	4 仁甫
元吉	文甫	王六	王森	王富二	王德明	王統卿
王寿	5 以方	可原	正之	用之	6 仲亨	朱明
7 何庚	何建	何慶	君仲	李寿	李璋	秀卿
阮寧	8 周之	周明	周福二	周顯	林茂実	青之
9 茅公甫	10 徐德	翁子和	10 唐三	11 張二	張四	張生
張用	張顯	曹新	陳子仁	陳敬	12 華甫	雇恭
黄四崇	13 楊三	瑞卿	詹仲亨	寿卿	15 鄭国	

(以上原刻)

3 山番	4 王子仁	王正	5 世通	可川	古之	古賢
6 朱長二	7 何庚	沈子英	8 周東山	杭宗	9 彦昭	胡君仲
10 倪平山	徐明	徐阿狗	高顯祖	11 張成	張君用	章才
章宇	陳士通	陳榮	陳德全	12 屠明道	13 楊景仁	虞保
14 趙秀	趙德明	15 鄭埜	17 繆士元	繆太亨	繆謙	

(以上元修)

巴友	丘安	汝敬	江子名	危寿	宗文	范双評
----	----	----	-----	----	----	-----

張名遠 張広祖 蔡就 (以上明初修)

元代の刻工名は元刊本や宋刊本の元修葉に多数知られるが、右の刻工の活動年代を証明する資料は意外に乏しい。ここでは字様と版面の状況から、原刻と元修とに分けたが、やや疑問も残る。大徳四年(一一三〇六)太医院刊の大徳重校聖濟総録にここで補刻とみた鄭埜の名があり、原刻とみた林茂実 王德明 以方 寿卿 らは後至元末江浙行省刊至正二年(一一三四二)西湖書院刊の国朝文類、後至元六年(一一三四〇)慶元路儒学刊至正一年修の玉海に出てくるから、補刻の方に移すべきかも知れない。明初修刻工というのは、洪武中間の歐陽文忠公集や韻府羣玉、これと多数の刻工が共通する唐文粹、南史、北史、遼史、金史、古史などに頻出する名である。

尾題「文献通考第三百四十八卷終」。

蔵印「葉氏／蒙竹堂／蔵書」(甲)(葉盛 一四二〇〜七四)、
「光昫／之章」「別下／齋印」「別下齋蔵書」(蔣光煦 一八一三〜六〇)、「国立同済／大学図書／館蔵書」。

両漢詔令二三卷 西漢詔令一二卷(卷二・七補写) 宋

林慮撰 東漢詔令一一卷 宋樓昉撰 元至正九年

(一三四九) 蘇天爵刊

九冊

後補金砂子散暗藍色表紙(二八・四×一七・八センチ)、金鑲玉装(料紙高さ二四・八センチ)。

大觀三年の程俱の序、改丁せずに続けて林慮の序と蔣階の序。咨夔の両漢詔令総論。両漢詔令目録。本文巻首は

「西漢詔令巻第一 凡直叙事實不載辭令者不録如紀載建元元年秋七月詔曰衛士軫置送迎二萬人其省万人如比類不録

高祖二十四

双辺(二八・八×一三・六センチ)。一〇行、一八字・注文小字

双行。版心 線黒口 双黒魚尾、題「西漢幾」あるいは「詔令幾」。ときに上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を刻する。刻

工名は 李友文 何秀父 秀父 占仲亨 謝成、東漢に王古賢、あとは単字が約二〇。

西漢詔令の末に程俱の西漢詔令後序、東漢詔令の末に嘉定一五年樓昉の東漢詔令後序がある。

青及び朱筆で句点が打たれている。

西漢詔令巻二はわずか六行で、補写。早く失われたらしく、上海図書館本(三部)、北京大学図書館本も欠巻または補写で、北京図書館本も四部のうち三部は欠(一も補写ではないか)、

明抄本も欠けている。ほかに巻七全五葉、巻六第二一〜三〇葉、巻一第一三葉、巻二第二一〜一三葉、東漢巻一第二一葉、同後序第二葉が補写されている。このうち巻七、一一、一二の欠葉は上海図書館本でも同じ場合があり、明代のあまり遅くないころから失われたかと思わせる。

蔵印「曾藏李/鹿山処」(李馥 一六六一〜一七四五)、「翰林何/須門人」、「口/鈞」(「曉霞」)。

新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節四二巻 不著撰人(明)

刊

六冊

後補香色表紙(二七・五×一七・二センチ)。

新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節序。新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節図譜。新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節綱目(目録)、末に「至元丙戌/重新續梓」の二行があるが、匡郭に囲まれてはいない。杜氏通典篇第題旨(新唐書杜佑伝の抜萃と杜佑の自序)。新刊増入諸儒議論姓氏。

本文巻首「新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節巻一」。巻三八以降は「杜氏」の二字を脱する。

双辺(二二・二×一四・七センチ)。一一行、二三字・注文小字

双行。版心 小黒口、双黒魚尾、題「杜氏通典詳節卷幾」、下象鼻に刻工名。刻工は、王元 王英 王海 王鏊 李進 李福 金祥 徐旺 徐昭 馬圭 馬奎 張中 張巳 張正 張英 張政 張勝 張実 張鐸 郭從礼 許鳳 楊忠等。

卷二七第一八葉、卷三七第九葉、卷三九第一七葉が補写。

尾題「新刊増入諸儒議論通典詳節卷四十二」。

蔵印は「夢／陳」「丁厓／□山」、「曾蔵丁／福保家」「震旦大
学／図書館／丁氏文庫」（丁福保 一八七四～一九五二）。

増入諸儒議論通典詳節は、通典二〇〇卷を大幅に刪略し、宋儒二人の議論を挿入した科挙受験の参考書と思われる、宋紹熙五年（一一九四）建安擇善堂刊本がその嚆矢であろう。存卷一～一八 北京図書館蔵・卷二四～二七 上海図書館旧蔵）。それに次ぐのが元の至元丙戌（二三・一二八六）刊本で、中国古籍善本書目には北京大学図書館（有欠）、中共中央党校図書館、北京市文物局（有欠）に蔵すると著録されるが、北京大学本はやはり「至元丙戌」の刊記があるものの元末明初の覆刻本である。この覆刻本は日本や台湾にもあるのに対して、元至元刊本の存在はまだ確かめられておらず、北京の他の二本も実査してみないとそれとは確言できない。この版は元末明初刊本より匡

郭が一回り大きく、行格も異り、字様も明の前記を遡るものでなく、刊記だけを踏襲したものである。北京図書館蔵の明洪武八年刊本とも首題の冠称や行格を異にし、それより後の刊である。前掲の刻工を李国慶の明代刻工姓名索引（上海古籍出版社 一九九八年）に照すと、成化・正徳の刊本に各一名、嘉靖万曆刊本に各五名ほどが共通するが、字様からは嘉靖まで降るようには思えない。

司馬温公経進稽古録二〇卷（欠卷一四） 宋司馬光撰

〔明前期〕刊

五冊

後補黄色表紙（二五・三×一七・四_チ）、襖装。濃橙色の副紙が添えられる。

司馬光の進稽古録表、朱文公与鄭知院書・朱文公語録中語、司馬温公経進稽古録目錄が続く。

本文巻首「司馬温公経進稽古録卷之一／（低格）伏羲氏」。

双辺（二二×一四_チ）。一〇行、二二字・注文小字双行。

版心 粗黒口、双黒魚尾、題はなく、丁付は数卷ずつ一冊を通す。

前半に朱句点が打たれる。

尾題「司馬温公経進稽古録卷之二十」。

刊記がないが、北京図書館に弘治一四年楊明璋刊本があつて、

一〇行二一字白口四周双辺とこの本と行格を同じくする。

蔵書印「元本」(木)、(四)「墨林／珍賞」(項元汴 一五二五〜九

〇)、「陳印／経儒」(陰) (陳繼儒 一五八八〜一六三九)、「方

功惠／蔵書印」(巴陵方民／碧琳琅館／珍藏秘笈)「方家／書庫」

(方功惠 ?) (一八九九)、「士／蔚」(読荘／老重／増)「宝儉

／堂函／書記」(曾蔵丁／福保家)「震旦大学／図書館／丁氏文

庫」(丁福保 一八七四〜一九五二)。

漢藝文志攷証四卷 宋王応麟撰 元後至元六年(一三四

〇)慶元路儒学刊 元至正一一年(一三五二)〜明嘉

靖二六年(一五四七)通修 (玉海附刻本) 二冊

後補藍色表紙(二五・六×一六・五チセシ)、襖装。

本文巻首「漢藝文志攷証卷一／(低九格)浚儀王応麟佰厚甫」。

左右双辺(二六・七×一二・九チセシ)。一〇行、二〇字・注文

小字双行。版心 白口、双黒魚尾、題「攷卷幾」、上象鼻に字

数、下象鼻に刻工名。補刻葉には上象鼻に「正徳元(二)年補

刊」「嘉靖丁巳」などの補刊年記を刻する。原刻の刻工名は漫

滅して単字のほかは読めない。

欠葉卷一第六葉。

尾題「漢藝文志攷証卷四」。

蔵印「積学齋徐乃昌蔵書」(徐乃昌 一八六八〜一九六六)。

子部

中説一〇卷 宋阮逸注 (明前期)刊 二冊

後補濃紺色絹表紙(二四・五×一六チセシ)、襖装。

文中子中説序、尾に篇目を附する。河汾肆子王壬の文中子纂

事(世系二葉、年表一葉)。

本文巻首「中説卷第一／王道篇(隔一五格)阮逸註」。

双辺(一九・五×一二・六チセシ)。一二行、二六字・注文小字

双行。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「中説幾卷」。

朱筆句点。

「中説卷之十」の尾題の次に、「光孝寺齋宿日得此本草草讀過

／誤字極多而待校正也／崔侂記(印) (松／年(陰)) (崔は

鶴)と「道光丙申冬琴川蔣宝齡讀」の墨書がある。

蔵書印「小瑯嬛／福地／張氏蔵」(陰)「味経／書屋」(張燮

一七五二—一八〇八)、「曾藏／張蓉／鏡家」「張芙川／鑒藏」

(陰) (燮孫蓉鏡)、「徐水喬／氏雀儕／藏書印」「喬雀儕／藏書記」

(喬松年 一八一四—七五)、他は所藏者名を特定できないから

首冊のものから順に列挙すると、「師氏／珍藏」(陰)「師氏守／

玉守章／昆仲印」、「修庵奚／氏珍賞」、「椿宣／書屋／藏書」、

「象尚／愚公」、「臣映／奎印」(陰)「子／耀」、「倚青／閣」(陰)、

「淨／照」。

益山書影所掲二本のうちの一と同版で、中国古籍善本書目は明刻本としている。

慈溪黄氏日抄分類九七卷 慈溪黄氏日抄分類古今紀要一

九卷 宋黄震撰 [明]刊 明正徳一三年(一五一八)

龔氏明実堂修印 三〇冊

後補香色覆表紙(二七・六×一六_チセ_ン)。後補乳白色元表紙、

外題・目録外題を墨書。

元至元三年沈陸の黄氏日抄序、その末に双郭双行(外郭二二・八×五・二_チセ_ン)の木記があるが、文字が刻されていない。次に慈溪黄氏日抄分類目録。

本文卷首「慈溪黄氏日抄分類目卷之一／(低二三格)慈溪黄

震 東莞 編輯」。

双辺(二四・一×一二・四_チセ_ン)。一四行、二六字。版心線

黒口、双黒魚尾、上象鼻の上半に「黄氏日抄」の大題、中逢に

「論語二卷」のような小題を刻する。粗黒口の修葉がある。傍

点傍線を刻。

第二六冊尾に「八十一卷原官板無文字」、二七冊尾に「八十

九卷源無文字」とあって、原欠の意を示す。

首の序末のほかに卷二末でも、木記の文字が剝去されており、ともに原刻葉である。一方、卷五六の本文末、尾題の前に、

「正徳戊寅歲秋九月／菊節龔氏明実堂葉」の双行木記があり、

これは補刻葉である。原刻葉は少しく漫滅しているのに対し、

補刻葉にはやや白地の料紙で刷りのかなり新しいものがある。

龔氏明実堂が補修して印行した際に、正徳以前の原刻の刊記を

削除したのであるが、これも明実堂であったかどうか。中国

古籍善本書目は「明正徳十四年書林龔氏明実堂刻本」と著録し、

他に安徽師範大学図書館、湖南省図書館、中山図書館の所蔵としている。

第三〇冊は慈溪黄氏日抄分類古今紀要目録のあと、首題「慈溪黄氏日抄分類古今紀要卷之一／(低一〇格)慈溪黄震

東 発」。単に「古今紀要」と題する巻もある。

蔵印は「魏氏温雲／蔵書画印」と「仇顛／之印」。

程史残本（存巻一～四） 宋岳珂撰 〔宋嘉定 嘉興〕

刊〔元明〕通修 二冊

後補香色表紙（二六・九×一七・三_チセン）、襷装。

程史一二巻の首四巻の残本。岳珂の自序や目録を欠き、「程史巻第一十二則／（低七格）相台岳 珂」の本文首題に始る。

宋の原刻葉の版心は白口、単黒魚尾、元修葉は白口または粗黒口であるが、巻一首葉は明修で、左右双辺（二〇×一四・九_チセン）。九行、二七字。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「程史巻幾」。

原刻とみられる白口、左右双辺の巻一第一三葉には昌の刻工名があり、粗黒口の元修に沈良、粗黒口の明修に昌がある。

巻一第二～四葉は欠。巻一第一五・一六、巻三第一〇・一五・一六、巻四第四・五・一三・一四葉は補写。

中国訪書志七二六頁参照。

同 零巻（存巻九第二～四葉） 〔明前期〕刊 一冊

後補薄藍色表紙（二八・四×一八_チセン）、襷装（料紙高さ二

六・九_チセン）。

首葉を欠き、首題のある葉はない。

双辺（二〇・八×一四_チセン）。一〇行、二〇字。版心 粗黒口、

双黒魚尾、題「程巻卷九」。

状元雙筆の残三行、堯舜二字、西隆南寇、鼈渡語の題だけを収める。

四部叢刊本と同版。

姓氏急就篇二巻 宋王応麟撰 元後至元三年（一二三三七）

慶元路儒学刊 元至正元年修（玉海附刻本） 二冊

後補濃藍色表紙（三一・九×一九・二_チセン）、襷装。

本文首題「姓氏急就篇上／（低九格）浚儀王応麟伯厚甫」。

左右双辺（二一・九×一二・七_チセン）。注は低一格、小字双行

二一字。版心 白口、双黒魚尾、題「姓氏一（二）」、上象鼻に

字数、下象鼻に刻工名。耳格に「姓氏」と刻する。

刻工名は、士良 任子敬 仲裕 克明 胡泰之 德中 德章 寿卿

等。

この二巻に明修は認められない。

尾題「姓氏急就篇卷下終」。

姓氏急就篇は単行の場合は史部伝記類に属するのであるが、ここでは当館目録に従った。

関記」。

詩学集成押韻淵海二〇卷 元巖毅編 [明前期] 覆元後

至元六年梅軒蔡氏刊本 二〇冊

後補濃紫色表紙(二五×一五・七_チセ_ン)、金鑲玉装(料紙高と二二・八_チセ_ン)。

至元庚辰張復の序、増修詩学集成押韻淵海凡例、増修詩学集成押韻淵海目録は補写。

本文巻首「詩学集成押韻淵海卷之一 上平声(墨_墨田) / (低六格)建安後学巖毅子仁編輯」。

双辺(一八・六×一二_チセ_ン)。一二行、二一字前後・注文小字双行二八字前後。版心 小黒口、双黒魚尾、題「匀海幾(フ)」。

尾題「新編詩学集成押韻淵海卷之二十 下巻終(墨_墨)」は本文にすぐ続いてあり、ここで料紙が一直線に裁断されている。明の刊記があつたかは不明。

蔵印「乾隆／御覽／之宝」(楕_楕)「天禄／琳琅」「天禄／繼鑑」(陰)「五福／五代／堂宝」「八徵／耄念／之宝」「太上／皇帝／之宝」(乾隆 在位一七三六〜九五)、「□／生」(陰)「楊□□／

統高僧伝三二卷 唐釈道宣撰 [明洪武五〜三二年(一

三七二〜九八) 金陵蔣山寺刊南蔵本] 一四冊

後補紺色表紙(三三・六×三〇・六_チセ_ン)、包背装。

「統高僧伝序」「唐釈道宣撰」、この中間に「穀一」の千字文号が入り、その上に「此号七卷」、すなわち穀が七卷あることを示す。

本文巻首「統高僧伝卷第一」。次行に「訳経篇初 本伝六人 附見二十七人」とある。

天地 二四・三_チセ_ンを隔てて横線を引き、無界、一紙に三〇行、行一七字。五折するように六行ごとにわずかな空行がある。版心は一紙ごとに交互に第六〜七行、第一二〜三行の間にあり、「穀一」のように千字文号と丁付を刻する。半葉約二九_チセ_ンで綴じ、右の枠の中広のところに刻工名を陰刻する。首尾の天地の余白のところに花、炎、十字などの模様を散らす。尾題の後に音釈を掲げ、もう一度、尾題を掲げる。千字文号は穀のあと振 櫻世。

刻工名は次の有宋高僧伝のものを含めて、ほぼ次のようなも

のがある。

4 文成	文和	文翁	文得	方子華	方祀生	王己一	夏遠童	孫人	徐六孫	徐大生	徐成	徐成一	徐克敏
王以成	王安	王忍二	王季二	王保	王春保	王眞	祝佐	祖述	祝景清	袁受	高元寿	高支直	婁道名
王眞宸	王黑仔	王黑兒	王務	王喜仲	王敬遠	王貴	張童慶	張貴孫	凌受	凌受一	章豪	郭仲勉	郭玄遠
5 丘耘	占羊仔	占再生	占每	史衍里	甘奉一	田奴	郭雪良	郭景生	郭眞	郭暉	陳七	陳三	陳文
玄達	永安	6 仲只	仲庄	仲免	任保同	任得同	陳本立	陳汝林	陳光	陳厚	陳海	陳康孫	陳祥
朱子貴	朱文	江一	江眞	江万里	江德	羊今保	陳細孫	陳声	陶升同	陸晏	陸喜	喻斗生	喻信中
羊烏	羊豪	7 伯勗	何狗	余安定	余興	吳三祖	喻待名	喻待鳴	彭玄達	彭暉	景生	景霖	曾伏
吳五	吳玄生	吳良清	吳均受	吳是一	吳通孫	呂名	僧秀方	曾林仔	童七	陽始仔	馮左保	馮得一	黃五
宋普	肖寺伸	李天	李毛	李伯清	李谷保	李受理	黃足	黃森	黃保	13 楊丑俚	楊仲森	楊成	楊保
李始孫	李苟	李苟兒	李茂遠	李寅仔	李啓二	李保四	楊孫仔	楊国礼	楊清	楊蒲仔	楊関	熊仏保	万仲
李記	李南一	李農仔	李斌	李添右	李添得	李諒一	万爵三	葉益	葉興	虞得	虞義	虞曾	虞鄭
李謙	李賢	李応仲	汪保兒	汪春保	汪添得	沈新	雍子容	雷伴二	14 廖玉采	趙保	趙阿添	15 劉仲	劉友
良仔	良記	辛一	辛堡	8 周七如	周子義	周奇生	劉生	劉志忠	劉季生	劉季真	劉尚謙	劉原	劉佳孫
周紹俚	周景	周謙	孟文	孟尹	孟恠	孟起宗	劉孟存	劉眞	劉從受	劉勝戸	劉慶生	潘茂実	潘晋
宗善	易中	券童	林伯	林伯福	林伯權	林受	蔡義	鄧仁	鄧仕	鄧伏一	鄧曲陽	鄧求寧	鄧始俚
芦虎	芦普賢	芦顯	金伏来	金福来	9 侯暹	思敬	鄭孟俚	鄭妹兒	鄭雲良	16 廬↓芦	謙恵	頼好	17 薛志良
段世初	段世昌	泉一	胡弟兒	胡南三	昭孫	范皋	謝友二	18 瞿関保	千字文号が刻されるから大藏経の一部であり、その第五一〇				
范普	計阿用	記仁	記養	彦四	10 原佐	唐六							

番の轂から五一六番の富までで、後半の史伝部に属するものと思われるが、宋代以来の印刷大蔵経のどれのものか、この刻工名を手がかりに考えることになる。

この表は次の有宋高僧伝との双方を含めてあり、わが国に数多く伝来している宋元の大蔵経にはあまり見られない名が大半であるが、野沢佳美氏の近著「明代大蔵経史の研究―南蔵の歴史学的基礎研究―」（汲古書院 一九九八年）によって、これが明の南蔵であるらしいことを教えられた。氏は元後至元三年（一二三三七）序刊の慈溪黄氏日抄分類と古今紀要、泰定元年（一二三二四）刊後至元五年（一二三三九）修の文献通考（前掲）、明洪武五年（一二三七二）刊の元史、宋刊の南北朝七史や元大徳九路儒学刊十史等の元末修葉、そして明初刊の西山先生真文忠公文章正宗、古史、唐分粹、九路本南北史・隋書と元刊金元史の明初覆刻本の刻工と、三〇名ほどが共通することを指摘される（二五〇頁）。このうちに主に元末に近いと思われる王保 呉五 孟起宗 徐成 陳七 陳文 陳厚 黄保 楊成 楊保 潘晋 薛志良等の名が含まれるのである。この書を恵与されて、これと正しい名が含まれるのであるが、更めて「立正大学図書館所蔵明代南蔵目錄（同館編）」と氏の解説の「刻工者」によって、この両高僧伝

がこの千字文号で入蔵されているかと刻工名とについて、さらには原本によって確認したいと考えている。

南蔵はその後に焼失し、永楽中に再刻されたとされるが、この刻工による経巻は氏の所説の通り南蔵本であろうと思われる。

有宋高僧伝三〇卷 宋釈贊寧等奉勅撰 〔明洪武五〕三

一年（一二三二一―九八）金陵蔣山寺刊南蔵本 一〇冊

続高僧伝と同じく後補紺色表紙（三三・六×三〇・六センチ）、包背装。

進高僧伝表、有宋高僧伝序ともに端拱元年僧贊寧撰。

本文主題「有宋高僧伝巻第一」（低四格）左街大寿寺通慧大師

賜紫贊寧／（同）左街相国寺講経論徳賜紫智輪／（同）同奉／（同）

勅撰／（低五格）訳経篇等一之一 正伝三人
附見一人。

版式も続高僧伝とまったく同じく、千字文号は祿修富で、それぞれ一〇巻ずつとなっている。刻工名は前掲の続宋高僧伝のものと一緒に括してある。

折疑論（首尾欠） 元釈子成撰 釈洪智述注 〔明初〕

刊 一冊

後補濃紫色絹表紙（三〇・六×一七・八_チセ_ン）、金鑲玉裝（料紙高さ二七・二_チセ_ン）。

首三葉半欠、第四葉裏四行まで序らしく、「時辛卯中秋八日書」で終る。その次行（第五行）に首題「折疑論 金台大慈恩寺（_二隔_一）西域師子比丘述註」があり、その次行に「曲而断之謂折猶予不決之謂疑評議難辨之謂論」と註記する。

双辺（二〇・二×一四_チセ_ン）。九行、一九〇字・注文小字双行三二〇三五字。版心 白口、単黒魚尾、題「折疑」。

一部に主句点、行間に校字を書入れる。また朱筆で「達磨九年不語顔回終日如愚」の一行。

「会名第二十」の第四葉表まで、全巻で第六二葉表まで存し、以下を欠く。

太上老子道德經四卷 旧題漢河上公章句〔明〕刊 四冊

後補暗藍色表紙（二六・四×一五・九_チセ_ン）、金鑲玉裝（料紙高さ二三・五_チセ_ン）。

老子道德經太極左仙公葛玄序、老子聖紀図、混元三宝之図、初真内観静定之図、金円之図。

本文首題「太上老子道経卷上」（低八格）無垢子何道全述註」。

双辺（一九・三×一二・四_チセ_ン）。八行、一七字・注文小字双行。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「道德上（下）」。

墨筆で句点、傍点、眉上に校語を書入れる。補写が巻上第七・八葉。

卷二以下の首尾題は「太上老子道経上卷之二」（卷二首尾）、
「太上老子德経卷之下」「太上老子德経下卷之三」（卷三首尾）、
「太上老子德経下卷之四下」「太上老子德経下卷之四終」（卷四首尾）。

巻末に最富の重刊道德経後序がある。「鄭重明」の蔵印。

冲虚至德真経八卷 晋張湛注 唐殷敬順积文〔明前期

建安〕覆元刊六子全書本 四冊

後補香色表紙（二八×一六・五_チセ_ン）、金鑲玉裝（料紙高さ二三・六_チセ_ン）。水色地単郭題簽を貼るが、題は未記入。

張湛の列子序、そして冲虚真経目録。

本文巻首「冲虚至德真経卷第一」（低三格）列子（隔八格）張湛処度注」。

双辺（一七・五×一一・四_チセ_ン）。一一行、二二字・注文小字

双行。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「列子幾卷（フ）」。

一部に朱句点。

益山書影、嘉業榮善本書影、旧京書影⁵⁵⁸₅₅₉所掲本と同版。中国訪書志五四〇頁を参照。

蔵印は嘉業堂印のほかは未詳。「劉印／承幹」（陰）「翰／怡」

「嘉業／堂」（劉承幹 一八八一〜一九六二）、「張印／百熙」（陰）

「張百熙／長爵年／囿子孫」（陰）「長／叔平」「長沙□山張氏梅

華墅主人珍藏」、「大学／生章」「梁国／□印」（陰）「詩書／□印」等。

集 部

李翰林集三〇卷 唐李白撰 〔明〕刊 一二冊

後補暗藍色表紙（二八・八×一七・四_チセ_ン）、金鑲玉装（料紙 高さ二六・六_チセ_ン）。

宋咸淳己巳（五年）涅万里の序。唐宝応元年李陽冰の草堂集序、宋咸平元年樂史の李翰林別集序、魏題の李翰林集序、曾鞏の李翰林集序が改丁せずに続く。故翰林学士李君墓誌並序は李華の撰。唐故翰林学士李君喝記は劉全白等の撰。

本文巻首「李翰林集巻第一／（低七格）翰林供奉李白」。

単辺（一七・九×一三・一_チセ_ン）。一〇行、二〇字・注小字双

行。版心 白口、魚尾がなく横線で三格に区切る。題もなく中段に「卷幾」、下段に丁付。

墨釘の箇所がある。

「李翰林集巻第三十」の尾題の後に、新唐書本伝。

目録は咸淳己巳（一二六九）刻本と、カードに咸淳刻本、また明正徳八年鮑松覆宋刻本と著録される。

蔵印の「宝綸／堂書／画図記」（陰）は齊召南（一七〇三〜一七八）か。他も未詳の「劉印／道開」「古羊劉／氏惟吉」（陰）「劉氏／惟吉／珍藏」、「覺軒／老人」「□／齋」「平生愛／詩仍／愛書」「賞心／樂事」「子孫□／華卿」。

分類補注李太白詩二五卷 唐李白撰 宋楊齊賢注 元肅士贇補注 〔明〕覆元至大三年余氏勤有堂刊本 六冊

後補薄青色表紙（二四・九×一五・一_チセ_ン）。

「分類補注李太白詩巻之一／（低七格）春陵楊 齊賢 子見集 註／（同）章貢蕭 士贇 粹可 補註」。 単辺（一九・三×一二・五_チセ_ン）。一二行、二〇字・注文小字

双行二六字。版心 白口、魚尾がなく、横線で四格に区切り、第二段に題「李詩註卷幾」、三段に丁付を刻する。

卷二五の第二〇葉が欠け、二二葉で終るが、以下わずかに欠か。台北故宮博物院蔵本も同じ。一部に朱句点。

目録末に双辺双行の木記があつて、「至大辛亥／三月刻」とある。故宮本は匡郭だけを存して文字がない（中国訪書志一三三頁下段）。この至大三年刊本の覆刻であろうが、字様は良くなく、粗雑といふべく、覆刻本をさらに覆刻したものであるう。

蔵印は「甫／皇」「此扇／以好不／以新」(円)「不知／其人可／序」(円)。所有者未詳。

同 (明前期) 刊

二〇冊

後補明藍色表紙(二六・五×一五・七センチ)、襷装。

至元二八年蕭士贇の新刊李太白詩序、分類補註李太白詩目録。

本文巻首「分類補註李太白詩卷之一／(低二格) 春陵楊 齊

賢 子見 集註／(同) 章貢蕭 士贇 梓可 補註」。

双辺(一九・三×一二・八センチ)。一一行、二三字・注文双行。

版心 粗黒口、双黒魚尾、題「李太白詩幾卷」。

墨筆で句点、圈点が一部に施される。卷二五は尾題を欠く。

蔵印は「張万／善印」(陰)(明人か)、「張／乃熊」(陽)「芹／伯」(張乃熊 光緒三年貢生 鈞衡の長子)、「吳興劉氏／嘉業堂蔵」(劉承幹 一八八一—一九六三)、「石／山人」「望徴」(楢)。

集千家註分類杜工部詩集二五卷文集二卷 唐杜甫撰

宋徐居仁編 黄鶴補注 詩集 (元至正八年(一三

四八) 広勤書堂) 刊 文集 (明初) 刊 二四冊

後補乳白色表紙(二八・九×一八・一センチ)、金鑲玉装(料紙

高さ二五・二センチ)。

集千家註分類杜工部詩目録、この末に台北故宮博物院蔵本は刊記が剝去されてあるというが(中国訪書志二七二頁)、ここにはその痕跡もない。集註杜工部詩姓氏。

本文巻首「集千家註分類杜工部詩集卷之一／(低七格) 東萊

徐 居仁 編次／(同) 臨川 黄 鶴 補註」。

双辺(一九・八×一二・七センチ)。一二行、二〇字・注文小字

双行。版心 小黒口、双黒魚尾、題「杜詩註卷幾」。

尾題「集千家註分類杜工部詩卷之二十五」、早印本にはこの後にあるという「壬寅広勤堂」の刊記がない。集千家註杜工部詩門類がここに綴じられているが、第二葉第二行以下が空行で、四行半のところまで切断され、鍾・鑪式の木記がない。杜工部伝序碑銘も欠く。

文集の首題は「杜工部文集卷之幾」。

詩集とはやや字様が異り、刊刻は明初に降るかと思われる。

蔵印は「吳興劉氏／嘉業堂蔵」。

集千家註批点杜工部詩集二〇卷文集二卷 唐杜甫撰 宋

黄鶴補注 劉辰翁評点 (元末)刊 一〇冊

後補暗紫色表紙(二七・三×一六・七_チセ_ン)、金鑲玉装(料紙

高さ二三・四_チセ_ン)。

集千家註批点杜工部詩集目錄。尾に木記を剝去したらしい跡が残る。

本文首題「集千家註批点杜工部詩集卷之一(低六格)須溪先生

劉 会孟 評点」。

左右双辺(二一・二×一三・七_チセ_ン)。一四行、二四〇二五字・

注文小字双行二五字。版心 小黒口、単黒魚尾は下方だけ、題

「杜詩幾」。傍点線、圈点を刻する。

「魯言曰」「黄鶴曰」等、注に引用の標目は墨冊陰刻。

各卷末には、卷五・七一〇・一四・一八・一九を除いて補遺が附く。それぞれに首尾題があるが、「杜詩註一卷補遺」「批点杜詩註二卷補遺」(尾題)など不定。

卷一八首は改丁せず、卷一七第一八葉裏に首三行を空けただけで始る。

卷二〇葉は第一四までで、以下欠。

朱筆で句点・傍点・圈点が打たれる。

詩集が終った後に、劉将孫の序、杜工部年譜。集千家註杜工部詩集附録として、元稹の唐杜工部墓誌銘、唐文藝伝、王洙の杜工部詩史旧集序、王琪の増修王原叔編次杜詩後記、王安石の杜工部詩後集序等が続く。

次で「集千家註批点杜工部文集目錄(低二格)須溪先生劉 会孟 評点」。

本文卷首「杜工部文集卷之一」。

左右双辺(二一・六×一三・六_チセ_ン)。一四行、二六字。

中国古籍善本書目に、復旦本は明初刻の存一三卷と明刻の完本を著録する。北京図書館にも一四行二六字黒口と行格等をは

は同じくする本が二部あるが、この完本は明というより元末刊本と見てよからうと思う。

朱文公校昌黎先生四〇卷外集一〇卷集伝遺文各一卷 唐

韓愈撰 宋朱熹考異 王伯大音釈 明正統一三年（一

四四八）王宗玉覆元至元六年日新書堂刊本 一〇冊

後補香色表紙（二四×一四・二チン）、襖装。

晦庵先生朱文公韓文考異序、宝慶三年王伯大序、李漢編の朱文公校昌黎先生集凡例、朱文公校昌黎先生集目錄（李漢編）と続いて本文。

巻首「朱文公校昌黎先生文集卷之一」（低一格）晦庵先生校異

（隔三格）留畊先生音釈」。

双辺（一九・四×一二・一チン）。一三行、二三字・注文小字

双行。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「昌文幾（フ）」。

「注文の首の「集註」「方云」「樊曰」「孫曰」「韓曰」等の標示は墨田陰刻。

末巻四〇の尾題が「朱文公昌黎先生文集卷之二十終」と誤刻されている。

次に朱文公校昌黎先生外集目錄、そして「朱文公校昌黎先生

外集卷之一」。

更に「朱文公校昌黎先生集伝」、「朱文公校昌黎先生遺文」。

朱句点・圈点・傍点、眉上・行間にも朱筆の書入がある。

蔵印「虞山錢曾／遵王蔵書」（錢曾 一六二九〜一七〇一）、

「風山／之漸」「白沙黄／草夢中／人」、「吳興劉氏／嘉業堂蔵」

「嘉業／堂」（劉承幹 一八八一〜一九六三）。

この本は目錄に宋刻本と著録され、中国古籍善本書目では一三三七番の元刻本がこれに当るかと思われる。しかし四部叢刊本とまったく同版であり、四部叢刊本には門人李漢編・汪季路書という朱文公校昌黎先生集序の後に七行の刊記があり、末行に「戊辰十月吉旦 書林王 宗玉 謹識」とある。その戊辰は字様、とくに粗黒口の版心の形式などから、明正統一三年とみられる。この刊記が削除されたもので、同じ例が台北の中央図書館北平蔵本（中国訪書志二七五頁）、斯道文庫蔵本（慶応義塾大学斯道文庫蔵貴重書蒐選第二二番 補配本巻一・二）にある。

晦庵先生朱文公文集零本（存巻八七） 宋朱熹撰

〔元〕刊〔明〕修 一冊

後補暗藍色表紙（二九・一×一七・五チン）、金鑲玉装（料紙

高さ二四・九チセン。

本文首題「晦庵先生朱文公文集卷第八十七」(一格)／蔡文／
(三格)祭籍溪胡先生文」。

左右双辺(二〇・五×一五・三チセン)、一〇行、一八字。この第一葉は明修で、版心 粗黒口、双黒魚尾。第二葉は原刻で、白口、双黒魚尾、題「朱文公文集卷八十七」、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名、古片 呂弓 等。

尾題は上二字が破損して「生朱文公文集卷第八十七」。

目録に「宋刻元補本」とあり、巻末に「宋刻十五頁元補十八頁」と墨書されている。中国古籍善本書目には該当する本がないが、版式・字様から元刊明修とみられ、その割合は元一四、明二〇で、第三二葉は明修も正徳ごろに降りそうである。ただし中国古籍善本書目にはすべて宋刊で元刻本はなく、北京図書館古籍善本書目著録本もこの本と同じ一〇行一八字本が七部、すべて宋刊(宋・元・明修)本である。一方、静嘉堂蔵本(静嘉堂文庫宋元版図録)、台北の中央図書館蔵の二部(中国訪書志五八〇一頁)等は元刊とされ、これは刻工名からも正しいと認められる。この残一卷には姓名を具す刻工名がないが、これと同版であろう。

蔵印は「錢唐／沈兆／霖印」(陰)「臣沈兆霖」(陰)「沈兆霖」、

「春波沈氏／珍藏図籍／書画印」、「海日／楼」(陰)「海山／靖廬」(沈曾植 一八五〇一八九二)、「蟬隱／盧秘／籍印」(羅振常 振玉の弟)。

国朝文類七〇卷 元蘇天錫編 元至正二年(一三四二)

西湖書院刊(明) 至成化九年通修 四〇冊

後補香色表紙(二六・九×一八チセン)、襖装。

至大二年准中書省請刻移咨江南行省鈔梓咨文、至正二年二月江浙等処儒学提举司刊補改正書版下杭州路西湖書院劄子。元統二年王理の国朝文類序、同じく陳旅の序。国朝文類目錄が上中下三卷。その末に「儒士葉森対」と校者名がある。

本文巻首「国朝文類卷第一」。賦、その琴賦から始まる。

左右双辺(二一・八×一四・七チセン)。一〇行、一九字。版心

線黒口、双黒魚尾、題「国朝文類卷(第)幾、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名。明成化修は粗黒口で、そこに「成化九年」

「吏部重刊」のように陰刻する。刻工名は、了山 子成 王林

林茂実 王仏 中之 右之 古賢 朱言 羊子名 呉丑 施

沢之 袁榮 陳榮 楊景川 遠林 趙明 煥之等。

冒頭の咨文と劄子によって、至元中に江浙等処儒学で開版し、至正二年に西湖書院で脱漏を補って刊行したことが明らかであり、刻工も前後して江浙等処儒学と西湖書院が刊修を行った六書統溯源や文献通考と共通する。

原刻葉で刷りの良いものがあれば、漫漶の進んだ葉もある。

刻工名が中国訪書志(二九五頁)所掲のものより少いのは、それより後印であることを示す。明修は両度にわたっている。

卷二第一五葉裏以下、卷三第一葉、卷四五第一八葉は欠葉。

蔵印は「古香／書屋」(安岐 一六八三?)、「王沅／私印」

(陰)「芷橋／氏」(陽)「廉隱／居士」(陰)「王沅」、「太原李子」(陽)。

三蘇先生文集七〇卷 宋蘇洵・蘇軾・蘇轍撰 編者未詳

〔明前期〕刊

一六冊

後補暗藍色表紙(二九・二×一六・八センチ)、金鑲玉装(料紙高さ二五・二センチ)。

三蘇先生文集標目、老泉先生墓誌銘 歐陽文忠公撰、東坡先生墓誌銘 穎浜先生撰。

本文巻首「三蘇先生文集巻第一／老泉先生」。老泉先生は一

一卷、東坡先生が卷一二から三二卷、穎浜先生が卷四四からの二七卷で構成される。

双辺(一九・六×一二・七センチ)、一四行、二六字。版心粗

黒口、双黒魚尾、題「三蘇文幾」。丁付は数巻数冊を通して打たれているが、版心部分の破損がひどく詳細不明。

墨釘の箇所が多く、とくに首の墓誌銘は老泉先生に一三、東坡先生に二一ある。

卷五〇第一葉が欠葉。

墨筆の句点、傍点、眉上の書入れが少からずある。

尾題「三蘇先生文集巻之七十終」。ただし「老泉文抄巻之五(一七)」、「三蘇文卷第十一」などもある。

樂府詩集一〇〇卷 宋郭茂倩編 元至正元年(一三四一)

序刊〔明〕修

二四冊

後補濃紫色表紙(二九・五×一九センチ)、襷装。印刷題簽「元本樂府詩集」、篆書。

至正初周慧孫の序。至元六年李孝光の樂府詩集序。樂府詩集と題して作者姓氏、ただし第三葉以下欠。樂府詩集目錄上下。

本文巻首「樂府詩集巻第一／(低六格)太原 郭 茂倩

編次」。

左右双辺(二二・五×一四・五センチ)。一一行、二〇字。版心線黒口、三黒魚尾、題「楽府詩集卷幾」、象鼻に字数、下象鼻に刻工名。刻工は施惠のほか単字で朱彦寸等。粗黒口の修葉に呉丑 王林 舒関。

粗黒口の修葉は全体で一〇葉余で、その刻工名は台北の中央図書館本(中国訪書志五九六頁)のものより少い。

補写葉が一九葉ある。目録下第七・八・四五・四六・四九・五〇、卷六七第五・八、卷六八第七、卷六九第一・二、卷七十二第一・二、卷九五第五・六、卷九七第七・八葉。

一部に朱筆で句点、圈点、傍線が施され、また墨釘のところ
に文字が補筆されている。

蔵印は、「濮陽李／廷相家／蔵図籍」(明李廷相 一四八一―一五四四)、「侯官／楊浚」(陰)「内史／之章」「閩楊浚雪滄／冠
悔堂蔵本」(楊浚 咸豊二年進士)。

又 零本(存卷三九・四〇 有欠葉)〔明〕修 一冊
後補香色表紙(三〇×二八・五センチ)、金鑲玉装。

両巻とも首尾完好でなく、卷三九の存葉は第三・六・九―一

三葉(全一三葉)、卷四〇は存一・五・八・一〇・一一葉。

卷三九第八葉は粗黒口の明修で刻工は舒関。補刻はこれだけであるが、版面に割れめがめだち、前掲本より後印である。

蔵印は「円徒毛氏茹／槩軒秘／笈善本」(陰)「毛／賞」(陰)
「茹槩／審定」(陰)。

復旦大学図書館では、当時、高橋智氏が留学していた縁で一九八七年初夏以来、同館の善本書目に宋元版と著録されている本の閲覧調査を、格別のご厚意をいただいで、経部・史部と進めた。しかし上海図書館の方に重きを置くなどして中断し、七年もの空白を作ってしまったので、昨秋、思い直して子部・集部をも拝見し、ここにその結果を報告できるに至ったのである。同様に大学古籍整理研究所長章培恒教授がご高配を賜り、古籍部主任呉格氏がこの上なく便宜を計ってくださった。時間を費して蔵書印記の読解に協力もしていただいた。李慶・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。心から感謝の意を表したい。